



TITLE:

マリヴォーの恋愛思想と作品構造
一寓話から喜劇へー(Abstract_要
旨)

AUTHOR(S):

廣岡, 江梨子

CITATION:

廣岡, 江梨子. マリヴォーの恋愛思想と作品構造一寓話から喜劇へー. 京都大学, 2019, 博士(文学)

ISSUE DATE:

2019-07-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k21982>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（文学）	氏名	廣岡 江梨子
論文題目	マリヴォーの恋愛思想と作品構造—寓話から喜劇へ—		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文の目的は、マリヴォーの作品における恋愛の描かれ方の諸相から作家の人間観を導き出すことである。それにあたり、マリヴォーの喜劇における二つの問題を解決することを研究の着地点として設定する。一つ目の問題は、マリヴォーの喜劇の主人公たちが「誠実さへの欲求」と「嘘への寛容さ」を持ち合わせているという、人物造形の矛盾である。二つ目の問題は、マリヴォーの後期の喜劇が構造的に変化し、それまでの作品に比べて喜劇的な精彩を欠いているように見えるということである。これらの問題は、単に作品の形式上の問題ではなく、作家の恋愛観ないし人間観のあり方、その変化を表していると考えられる。これらの問題を解決することが、作家の思想を理解することにおいて重要な意義をもつだろう。そのためには、従来のマリヴォー研究で見出されていない視点を得ることが必要となる。そこで、これまで体系的に研究されてこなかったマリヴォーの寓話的作品に注目する。マリヴォーの寓話群は従来は一括りにされて扱われてきたが、個々の作品を分析し、比較することで、これまで見落とされてきたマリヴォーの側面が見出されるだろう。したがって、本論文では第1部において寓話を中心に考察し、第2部においてはそれを踏まえて喜劇の考察を行うこととする。</p> <p>第1部「寓話の考察」</p> <p>第1章「愛と欲望の弁証法—寓話における恋愛観の展開」においては、マリヴォーの恋愛に関する寓話群を、創作初期から晩年まで年代順に考察し、恋愛観とその根底にある人間観に関する概念のそれぞれにどのような意味が込められているか、またその変遷を明らかにする。初期の作品である『剣玉』では、「愛」と「狂気」が対置されており、そこにはプレッシューズの伝統に基づく理想主義的な恋愛観が表れている。ここでは「知性」と「理性」がともに「愛」を支えるものとされており、若い作家の素朴な人間観が見てとれる。作家が劇作を始めた時期の『愛と真実』では、「優しい愛」と「放縦な愛」が対置されている。「優しい愛」は『剣玉』における「愛」にあたるものであり、「旧き良き時代の愛」と捉えられている。「放縦な愛」は「流行の愛」であり、同時代を席卷する風俗と捉えられている。このような対置は、摂政時代の社会状況を表しており、同時代に対するマリヴォーの風刺的な視点を表している。</p> <p>『フランスの見物人』に挿入された「愛の土地」の寓話では、「旧き良き時代の愛」がいかに「美德」を生み出すものであったかが語られる。そこには前時代的な愛を惜しむ作家の視点も見出されるが、それだけでなく、「愛」そのものが複数の欲求のバランスによって成り立っていること、特に「自己愛」と「他者愛」のバランスとして</p>			

成立していることも示されている。ここから、作家が「愛」を単に風刺的視点だけでなく哲学的な考察の対象としていったことがうかがえる。劇作の中間地点に位置する『愛神の会議』では、「優しい愛」と「放縦な愛」の和解が描かれる。その和解には、「愛」そのものが抱える矛盾へのまなざしが表れている。また、「理性」と「愛」が人間の両輪であることが示されている。創作晩年の作品である『フェリシー』では、「愛」が「自己愛」から「他者愛」への移行を表していること、また、それが自己認識の契機となることを示している。以上のような寓話群の展開から、マリヴォーの目が恋愛の外部から内部へと移行していき、人間観を深化させていったことが読み取れる。

第2章「知性のジレンマー寓話から導かれる対立の諸相」においては、前章で扱わなかった寓話作品を中心に、マリヴォーにおいて「知性」がどのようなものとして捉えられているかを考察する。まず、知性は「物」に対する「言葉」の属性として捉えられている。『プリュテュスの勝利』では、言葉の能力である「知性」が「金銭」の力に敗北する状況が描かれる。これは、当時の社会の即物主義的な風潮における「知性」の不遇を表している。一方、『愛神の会議』では、「知性」がその風潮に迎合しつつある状況が描かれている。次に、「知性」は「真実」に対する「嘘」の属性として捉えられる。『愛と真実』と『愛神の会議』が示すように、「嘘」をつく「知性」は、社会を堕落させるものである一方で、人間関係を円滑にするために必要なものでもある。続いて、「知性」は人に好かれるための「魅力」として捉えられる。『哲学者の小部屋』の二つの寓話に示されるように、社会で受け入れられるには「知性」が不可欠である。一方、『マリアンヌの生涯』が示すように、外見的な魅力が「知性」と混同されることもある。最後に、「知性」は「理性」と対置される。『マリアンヌの生涯』におけるミラン夫人とドルサン夫人の対比に表れているように、「理性」は善良さであり道徳的な価値であるが、「知性」は自己愛に基づく才覚である。以上に見てきた「知性」の諸相から、マリヴォーの恋愛観と人間観に「嘘」と「自己愛」の問題が横たわっていることがわかる。

第3章「嘘と自己愛を越えて一鏡の前から真実の世界へ」においては、マリヴォーにおいて「嘘」と「自己愛」の問題がどのように展開しているかを、年代を追って考察する。『フランスの見物人』の中の「鏡の前の少女」の挿話では、他者の自己愛を目の当たりにした時の素朴な青年の衝撃が描かれる。そこには、嘘と自己愛を恐れる若き作家の素朴な人間観が表れている。ユートピア喜劇である『奴隷の島』と『理性の島』では、他者の自己愛に冷徹な視線が注がれる。また、人物の内面の声が次第に大きく描かれるようになり、作家の人間観の深化と表現方法変化の関係性も見てとれる。さらに、『哲学者の小部屋』の三つの挿話では、人間に表向きの「声」と内面の「声」が存在することが明確に示され、社会が嘘に満ちているという作家の感覚が表現されている。嘘を前提とする社会では、自己愛が嘘を生み出し、また自己愛が嘘を

覆い隠すということが示されている。以上のようなテーマと表現方法の変遷から、作家が人間と社会に向ける冷徹な目が作品の創作を通して研ぎ澄まされていったことがわかる。

第2部「喜劇の考察」

第4章「道徳的恋愛喜劇の形成—『改心した伊達男』から『腹心の母』へ—」においては、マリヴォーの後期喜劇の構造の変化が、作家の恋愛観とその根底にある人間観にどのように関わっているかを、転換期の作品と言われる『改心した伊達男』、『うまくいった策略』、『腹心の母』において考察する。これら三つの喜劇は、まず親のあり方において前期喜劇と異なっている。前期喜劇では基本的に親が不在であるか、あるいは親が子の恋愛に対して少なくとも権威としては介入しないものであった。『改心した伊達男』では親が子に対する道徳的規範となり、『うまくいった策略』では主人公が道徳的規範を得るために代替親を必要とし、『腹心の母』では親が規範ではなく虚構をもたらすものとなる。人物の機能のこのような変化は劇構造の変化とも関わっている。『改心した伊達男』は風俗喜劇の一種でもあり、道徳的恋愛喜劇とも呼べるものである。「理性の獲得」と「愛の獲得」を重ねた劇構造となっているのは、「伊達男」という類型を風刺しつつもその改良の可能性を示そうとしているからであると言える。ロジモンは伊達男であるが、放蕩であるというよりは放蕩を装っているところがある。彼は自己愛から、「伊達男」として見られることを望む。ここに自己愛による嘘がある。そして、周囲のはたらきによってその嘘は打ち砕かれ、同時に自己愛は弱められる。『うまくいった策略』もこの作品と似た構造をとっている。しかし、コケットである伯爵夫人の嘘はどこにあるだろうか。彼女は自己愛を隠そうとせず、信念のままに振る舞っており、むしろ正直であるように見える。それが、ドラントを失うことになると、自分の振る舞いが間違っていたことに気づく。コケットとしての振る舞いは、嘘というよりも無知によるものだったと言える。コケットとして振る舞うことの危険性を、愛を失うまで知らなかったということである。そして、自分が実はドラントを愛していたこと、したがって自分が本当はコケットではなかったということに気づくのもそのときである。これら両作品において、嘘あるいは誤りは、自己愛によって生じたものではある。しかし、伊達男であることやコケットであること自体は彼らの欲望の求めるものではない。実際には彼らは伊達男でもなくコケットでもないからである。伊達男やコケットという自己像は、もともと社会の風潮から与えられたものである。彼らはその自己像を身につけようとしたが、それが結局身につかないということを最後に発見するのである。このように、これら二つの作品においては、社会から与えられた虚構が、自己愛の嘘や誤りの要因となっている。これは、前期のマリヴォー喜劇とは異なる特徴であると言える。『恋の不意打ち』などの主人公たちは、相手の愛が確信できないからこそ自分の愛を偽っていた。それに対し、『伊達男』と『策略』の主人公たちは、相手の愛が明らかであるからこそ伊達男やコ

ケットを演じている。ここでは外部から与えられた社会的類型をはさむことによって、自己愛のはたらきが一段複雑になっているのである。『腹心の母』のアンジェリックは、自己愛の葛藤がないことにおいて、マリヴォー喜劇の主人公としてはより一層特殊である。彼女にとっての葛藤は、母が描く虚構の恋人像と、自分が描く確かでない恋人像の間で起こるものである。つまり、虚構は自己の外部にのみ存在するのである。これは、『伊達男』と『策略』において見られたような、嘘の外面化する傾向が、より一層強まったものと言えるだろう。このように、転換期の三つの喜劇は、自己とのあり方においてそれまでのマリヴォー喜劇と異なるものであった。嘘の外面化は、個人の内面と社会との接点にマリヴォーの目が向いていることを示しているだろう。これらの作品が『マリアンヌの生涯』と『成り上がり百姓』という社会的上昇の小説と同時期に書かれたことの意味もそこにあると言える。社会との接点において自己が確立するというマリヴォーの考えがここに表れているのである。

第5章「偽りの世界の恋愛—『愛と偶然の戯れ』から『偽りの告白へ』」においては、マリヴォー喜劇の主人公たちの「誠実さ」と「嘘」をめぐる心理的矛盾の問題について、それが最も顕著に見られる『愛と偶然の戯れ』と『偽りの告白』において考察する。『愛と偶然の戯れ』のシルヴィアと『偽りの告白』のアラマントはともに、結婚相手に誠実さを求めていながら彼の嘘を許すという一見矛盾する態度をとるのだが、その態度が実際には整合性をもつものである。その整合性のあり方は、二人のヒロインにおいて対照的である。シルヴィアは、終始一貫して「自己愛」に従って行動しており、「知性」を発揮する。彼女が相手の誠実さを求めることは、常に相手に対して優位に立っていたいという欲求の表れである。そして、彼女が相手の嘘を許すのは、それによって自分が優位を保てるからである。一方、アラマントは、終始一貫して「理性」に従っており、寛大さを発揮している。彼女は相手の誠実さとともに自分の誠実さも求めるのであり、結局は相手の嘘をも自らの寛大さで包み込む。シルヴィアの態度は、第3章で見たような「自己愛が嘘を生み、そして嘘を覆い隠す」という考え方を反映しているだろう。彼女においては、最後まで「自己愛」が「他者愛」に優れていると言える。しかし、第4章で見たように、その後に展開する「道徳的恋愛喜劇」では主人公の「自己愛」の矯正が描かれ、恋愛の終着点は「理性」に設定されるようになる。そこでは「愛」と「理性」が融合している。アラマントのような「理性」と「愛」を併せ持つヒロインの登場は、そのような作家の恋愛観に基づく喜劇の展開において必然であると言える。そして、それは言わば「知性的恋愛観」の行き詰まりによる「理性的恋愛観」への移行である。『恋の不意打ち』から『愛と偶然の戯れ』までの喜劇が示すように、恋愛は「知性」の駆け引きによって展開する。しかし、それだけでは自己愛を越えた愛に到達することはできない。後期喜劇群が示すように、本当の愛に到達するには「理性」が必要となるのである。このような考え方の移行は、「冷徹な」マリヴォーから「素朴な」マリヴォーへの回帰でもあったのでは

ないだろうか。つまり、作家は嘘と自己愛に満ちた現実の社会の姿を直視しつつも、そのような社会において理想主義的な「理性的な愛」が実現可能であることを示そうとしていると考えられるのである。そうした点において、作家の最後の三幕喜劇である『偽りの告白』は、彼の到達点であるとともに、いわゆるマリヴォー的な喜劇の終わりでもあったのである。

本論文の結論は以下の通りである。マリヴォーの作品における恋愛の諸相を理解するには、従来想定されてきた「理性」対「感情」という枠組みだけでなく、「理性」対「知性」という枠組みが必要である。「理性」と「知性」の区別はこれまでのマリヴォー研究において重視されていなかったが、本論文ではこの区別が重要であるということを示した。マリヴォーの喜劇は全体として知性から理性への移行による愛の成就を描くものである。また、その移行は「自己愛」から「他者愛」への移行でもある。人間が自己愛に支配される存在であることを強く意識していたマリヴォーは、その冷笑的な人間観に留まるのではなく、自己愛を乗り越える愛の力を称揚した。そこに彼の作家としての密かな葛藤があった。素朴さと冷徹さを併せ持つマリヴォーの作品は、十七世紀と十八世紀をつなぐ独特な作家の軌跡を示しているのである。

（論文審査の結果の要旨）

本論文は、18世紀フランスの作家マリヴォー（1688-1763）の初期から後期に至る散文作品および演劇作品を考察の対象とし、この幅広いコーパスについて丹念な読解と詳細な分析を行うことにより、後期の代表的な恋愛喜劇における人間観・道徳観の変化を論じた労作である。これまで日本ではほとんど体系的な研究の対象とされることのなかった作家に正面から取り組んだ点、フランスにおいても文体的な洗練（マリヴォーダージュ）によって特徴づけられることが多い作家の「思想」に焦点を当て、独自の観点から作品を論じている点で高く評価することができる。

第一部「寓話の考察」と第二部「喜劇の考察」からなる本論文の特色は、マリヴォーの1730年代以降の後期喜劇作品の特徴について考察するための前提として、他のジャンルの作品を視野に入れていること、特に寓話的作品を読み解くことにより、作家の恋愛思想の変遷をあらかじめ明らかにしようとする点にある。これまでのマリヴォー研究において十分に考慮されてきたとは言えない寓話形式の作品においてこそ、小説や戯曲よりも明確な形で恋愛の観念が表現されていると論者は考えるのである。これらの寓話的作品を年代順に分析することにより、恋愛を主題とする言説が社会風刺的性格のものから哲学的な考察へと深められていくこと、作家の目が恋愛という現象の外面から内面へと向けられ、心理分析の精度が上がり、内面の声というあらたな言語を作り出していくことが示される。先行研究の少ない分野であるだけに、本論文第一部で展開される詳細な作品分析と作品の意義についての考察はマリヴォー研究への重要な貢献であるといえる。

本論文全体を通じた議論の枠組みを設定するにあたり、論者はマリヴォーにおける恋愛が「理性」と「感情」の対立という通常の図式によるだけでなく、「理性」と「知性 *esprit*」の葛藤という問題としてとらえられるべきであると主張する。ここでいう「知性」とは他者の歓心を買うとともに自らの自尊心を満たすための才覚であり、恋愛において不可欠な要素とされる。一方の「理性」は寛大で善良な性格、自己愛よりも他者への愛が優っている状態と解される。この自己愛と他者愛の調和のテーマがマリヴォー喜劇の展開において重要なものとなることが第一部で予告され、第二部においてこの点が具体的に論証されることになる。

感情と理性の葛藤（「恋の不意打ち」のテーマ）が劇の展開を規定しているマリヴォーの初期喜劇に対して、論者が注目するのは「知性＝自己愛」が「理性＝他者愛」によって緩和され、乗り越えられていく構造をもつ1730年代以降の後期喜劇である。たとえば『改心した伊達男』（1734）は「愛の告白」という恋愛心理劇の結末と「分別の獲得」というユートピア劇の結末を併せもつ点において「道徳的恋愛喜劇」と位置づけられる。恋愛は「知性」の駆け引きによって展開するが、それだけでは自己愛を越えた愛に到達することはできない。本当の愛に到達するには「理性」が必要である—このような考えを反映し、マリヴォー後期の喜劇では主人公の「自己愛」の矯正

が描かれ、恋愛の成就是「理性」によってのみ可能になる、というのが論者の中心的な主張である。この観点からすると、『愛と偶然の戯れ』（1730）は「道徳的恋愛喜劇」を予告する作品であり、『偽りの告白』（1737）のアラメントのような「理性」と「愛」を併せもつヒロインの登場は、マリヴォー喜劇の展開において必然であって、言わば「知性的恋愛観」の行きづまりによる「理性的恋愛観」への移行を示すもの、と解釈される。この一見単純で素朴な「恋愛結婚」成就の図式の背後には、人間の自己愛に対して一倍感徹な観察眼をもっていたモラリストとしてのマリヴォーがいるのであり、その冷徹さこそがあえて予定調和的な恋の成就という喜劇の構成を選択させたのであって、ここにおいてマリヴォー喜劇は実質的な完成と終焉を見た、と論者は結論している。

以上の結論は慎重かつ丁寧な議論によって導き出されたものであり、さまざまな作品における類似の主題や設定を比較対照しながら、マリヴォーの道徳的関心の一貫性と個々の作品の特質を明らかにしてゆく論者の手法は繊細かつ堅実なものといえる。引用文の選択と分析も的確であり、巧みにパラフレーズしながら、要約と論点の整理が行われ、テキストの意味づけがなされていく論述のスタイルも明快である。

以上述べたように、全体として水準の高い論文であるが、いくつかの疑問点や課題も残されている。本論文のキーワードの一つである *esprit* には主として「知性」という訳語が当てられているが、社交的・対人的な意味で用いるのであれば「才気」、「機知」あるいは「精神」と訳すべきではないか。第一部の寓話の分析がモラリストとしてのマリヴォーの作品を通時的に扱っているのに対して、第二部は1730年代の喜劇作品に分析の対象を絞っており、両者は必ずしも有機的に結びつけられていないのではないか。さらに、本論文の主題である「恋愛」を普遍的な現象としてのみ捉えるのではなく、18世紀前半のフランスにおける社会的・制度的な制約という条件を考慮した上で歴史的文脈の中においても論じるべきではないか。また、マリヴォーの思想の特質を明確にするためにも、同じジャンルを手がけた同時代の作家や当時の文献資料についてより多く言及がなされるべきではないか。しかしながらこれらの留保は本論文の価値を何ら損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。令和元年5月31日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。